

## 南アルプスの生活

### 南アルプスの過去を学ぶ

南アルプス市芦安山岳館では、南アルプスの深い森林に覆われた急勾配の山の斜面に住んでいた人々の暮らしと文化を詳しく紹介しています。ここを訪れると、山村の暮らしの大変さ、そして地域の住民がどのようにして自然から学び、身のまわりにある物を最大限に活用していたのかを知ることができます。

### 伝統的な役割分担

昔は明確な役割分担が存在していました。女性、子供、高齢者は山のふもと（里山）で野菜や米を栽培したり、家畜の世話をしたりしました。米の収穫後に残った稲わらを使って縄を作り、その縄でわらじ、雪靴、道具類を入れるための袋を編みました。寒い冬の間、家族が暖かく過ごすためには裁縫や炭の扱いも重要な技能でした。

男性はほとんどの時間を森で過ごし、木を切り倒したり、薪や屋根板にするためその木を割ったり、木炭を作ったりしました。彼らは、今では希少な犬種の甲斐犬という山中での狩猟のために訓練された猟犬を連れて、カモシカをはじめとする野生動物を捕まえるため罠を仕掛けたり狩ったりしました。

男性も女性も、背負子という木の枠組にわら縄を巻き色鮮やかな布で飾った肩紐がついた運搬具を背負って品物や農産物を市場へと運びました。

### 南アルプスの林業

南アルプス市芦安山岳館に展示されている、木材の伐採、分割、成形、切断に使用された膨大な道具類は、この地域で林業がどれほど重要だったのかを示しています。現代の基準では、昔の方法は持続不可能とされますが、当時の林業従事者が広大な森林を完全に手作業で伐採できたことには驚かされます。山の間に通した木造の水路に切り倒した木を流すことにより、50 キロメートル以上離れた場所から木材を運ぶことができました。こうして運ばれた丸太は、その後、人が押すトロッコで線路の上を運ばれていきました。

今日、このような林業に使われた機構は過去のものとなり、わずか数人の職人だけがかつて日常の必需品と見なされていた品々を作り続けています。